

タイトル: 2022 年度研究セミナー (第 23 回)

日時: 2022 年 12 月 17 日 (土) ~18 日 (日)

場所: AA 研 304

「私の博士論文」

小倉智史 (AA 研)

本報告では、京都大学大学院文学研究科に 2015 年 3 月に提出した博士論文『「タランギニー」から「ターリーフ」へ 15-17 世紀カシミールの歴史叙述の研究』の執筆過程を、2008 年の博士前期課程進学前後から学位認定、およびそれ以後の研究への発展なども含めて報告した。

報告者と同じ専修研究室出身の研究者が、既に複数名「私の博士論文」で報告をしていたため、当該研究室の学風についてはこれまで当セミナーを担当していた所員の方々には既知のことであったかと思う。恥ずかしながら報告者は博士後期課程に進学した時点で、自らの博士論文の全体像を何も考えていなかった。報告者が曲がりなりにも博士論文をまとめることができ、その後も研究活動を続けていられるのは、院生時代に知己を得た海外の研究者との情報交換を通じて、自分の研究構想を具体化させることができたためである。特に報告者の場合、幸運にも研究テーマをほとんど同じくする、同年代のアメリカ人研究者と博士課程 2 年次に知り合ったことが、大きな転機となった。マイナーな研究テーマに取り組んでいる場合、なかなか国内では自分の専門とするトピックについて他の研究者と込み入った議論をする機会を得難い。そのような若手研究者にとっては、国外の世代が近い研究者との交流が、研究を進めるうえでの突破口となる可能性がある。そのような個人の体験を踏まえて、報告では若いうちから海外で催される国際学会に積極的に参加することの意義を説いた(ただし、参加者にやる気のないことで悪評を広めている学会も中にはあり、どのような学会に参加するかは慎重な検討が必要であることも付言した)。

また、過去の「私の博士論文」報告で繰り返し述べられている通り、博士後期課程進学から博士論文提出までの期間が短くなることは、もはや逆らいようがない趨勢である。その一方で、博士号取得のキャリア形成を考える場合、査読誌への論文掲載を含む業績の数がそれなりにあった方が有利に働くこともまた事実である。しかし、査読誌に論文を投稿してから掲載に至るまでにはそれなりの時間がかかるため(海外の学術誌の場合は特に)、限られた時間の中でどのように業績を増やしていくかが問題となる。報告者の場合は「小倉智史論文集」のような博士論文を執筆したため、各章をそれぞれ学術誌に投稿することが可能であった。しかし、全体のテーマが一貫しており、章間の議論が密接に結びついているようなタイプの博士論文を執筆する場合には、異なる戦略が求められるだろう。

報告者の博士論文提出に至るまでの道筋は、人との出会いという偶然の出来事に支えられた部分があまりにも大きく、これを再現可能かというところでは正直なところはなはだ怪しい。受講生にはあまり役に立たない話をしてしまって申し訳なく思うが、イベントを企画する側にまわった身としては、報告者が経験したような出会いを生み出せるようなイベントを、今後も企画できればと考えている。